

横川（山形県）

高校時代の3年間を、私は全寮制の高校で過ごした。私の卒業した基督教独立学園高校は、内村鑑三の弟子・鈴木弼美によって設立され、2008年度には創立61周年を記念する。なすべきことは労働、読むべきものは聖書、学ぶべきものは天然の三つのモットーを支柱に、俗世間から確立された山奥の、新潟の県境に位置する山形県小国町叶水で、最も自然に近い形で、最小限の人数で生活を送る共同体である。その私の暮らしていた独立学園に沿うように流れていたのが横川（厳密には学園の横



の地点では立川であるが、数十メートル下流ですぐに横川と合流し、一般的には横川で馴染み深いので横川とする。）である。横川の流れは、山形県小国町からまっすぐ南に下った、新潟県との県境にある飯豊連峰から始まる。飯豊連峰は、春から秋にかけて多くの独立学園の生徒が登る、たくさんの動植物を見ることができる自然の宝庫だ。そこの地蔵岳（高さ 1539m）、大丸森山（高さ 1502m）、鍋越山（高さ 1269m）などの山々が横川の流れのはじまりであり、横川の長さは 36.1km。飯豊連峰から北へと流れ下り、流れを西に変えて、小国町市街部の下流で荒川と合流する。小国町市街部を流れてきた横川は、北から南下する荒川と、荒川峡の上流付近で合流して西に流れ日本海をめざす。合流地点を過ぎて水量の増えた荒川を少し下ると、荒川一の景勝地の赤芝峡がある¹。その山々の豊かな自然を携えた横川が、自然と密接に関わる日々の生活の中で、大きく独立学園の人々の生活やその歴史全体のみならず、その地域全体に影響してきたことは言うまでもない。

私は、入学初日の眠れずにいる夜に、女子寮のすぐ下を流れる横川のせせらぎに安心したことを忘れない。47期卒業生でもあり、元女子寮舎監でもあった小原希先生は「在学中に映画、隣のトトロのワンシーンに憧れて、先生に内緒で籠に野菜を吊るして川で冷やして食べたことがある。今はダムの工事が進んでしまって、その場所はないけれど。」と私に在学中話してくれたことがあり、印象に残っている。学園の畑で作られる野菜はすべて沢の水で育てられている。沢の水で育った野菜を、沢の水が注がれた川で冷やして食べるという自然と共にある素晴らしい生活が、千葉から山形に移り住んだばかりの私には想像を絶した世界であったからだ。そして時折、女子寮の風呂の水が濁ることには驚いた。水道用水は横川に流れる前の沢水をくみ上げているため、雨が降るとその影響で水が若干

¹国土交通省北陸地方整備局 横川ダム工事事務所

濁るのである。雨と川の直接的な生活への影響をこれほど身近に感じたことはそれが初めてであり、なにより新鮮な感動を覚えた。汚いことでもなんでも自然の摂理なのだ。本来、山に雨が降ればその沢水を使っている私たちが目にするのは当然のはずであるが、普段の生活では、水道水は念いりに浄化されており、それらを目にして意識することはないのである。また学園で口にする水の甘さといったら、まさに自然の賜物であった。浄水器の水で育った私が人生で初めて、水に味があること、そして自然の水は甘いということを知った。春には川に沿って歩いて集めたフキノトウで天婦羅を揚げてみた。農繁休みに訪れる近隣農家では、田植えを手伝いながら、横川から引かれた、蛙の飛び跳ねる用水路で、稲の苗床を洗い、川の農業への恩給を学んだ。暑い日には同級生とタイヤチューブで川下りをし、盆地の夏でも川の水は切れるように冷たいことを肌で感じた。冬の労働作業の時間には、河原で、流木を細かく鋸で薪にしてパン焼き窯に使った。これらの、数え切れないほどの私の四季折々の思い出ひとつひとつは川とともにあった。それは私に限ったことではなく、卒業生在学生職員全員に言えることであろう。

しかし、卒業後初めて訪れた先の休みで見た川は大きく姿を変えていた。春の植物観察会や、秋の茸狩りの行事で歩いた川沿いの道は、ついにダムの貯水で埋め尽くされ、見る影もないコンクリートで覆われた大きな灰色の湖ようになっていた。私が在学中も、ダム工事が進む過程で、危険水域に位置する際の神橋が撤去された。学園と、横川を跨いだ外側を繋ぐ馴染み深い橋であったため、工事は衝撃的であった。そこから見える横川の景色がもう二度と見るできないことを実に寂しく感じた。順序は踏んでいたものの、先日の変化は劇的なもので茫然とした。

ダム建設理由について、「荒川流域は、古くから大雨が降るたびに大洪水が発生し、人々の暮らしを脅かし続けてきました。この流域の歴史は水害の歴史との闘いといっても過言ではありません。特に、昭和42年8月に発生した「羽越水害」は、90名に及ぶ尊い人命が失われ、住宅や田畑が流出し、道路や鉄道が寸断されるなど大きな被害をもたらしました。横川ダムは「羽越水害」のような恐ろしい災害が二度と繰り返されないよう計画されました。」と横川ダム工事事務所ホームページにあり、役割については「横川ダムは荒川流域の人々を洪水から守ることをはじめ、荒川に流れる水の量を調節して流域の人々の暮らしに必要な水を安定した量で供給します。また、横川ダム建設に伴って新設される水力発電所は、環境にやさしいクリーンエネルギーをつくり、一般家庭約12,000戸で使われる電気の量をおこします」²との説明だ。

創業者鈴木弼美の娘にあたり、ほぼ学園の歩みと共に叶水に住まわれている今野和子先生に横川の数十年にまつわるお話を伺った。60年程前は、「いわな、カジカなどの魚がややこしい許可なんてなく獲れたので、村の人はよく食べられていた。子どもたちもプールが小中学校に作られるつい最近までは、夏場は川遊びを毎日のようにしていた。あ

² 同上

と、昔は少し離れたところに鉱山があり、その付近は濁っていたのだけれど、横川と合流する辺りでまたきれいになっていた。その横川が40年程前の洪水で、危険水域まで水が達したためにダム建設の話がでて、村の人々は保証金をたくさんもらって水田や自宅を明け渡した。ダムといっても100年で土砂崩れになるというから、ダム工事に反対する人もいたのだけれど、農業に見切りをつけていた人は、保証金をもらって、そのまま村から出ていくケースも少なくなかったため、間もなく工事は始まってしまった。」

私の在学中は、夏になると蛍観察に行ったものだが、これからはそれも見ることとはできなくなるのだろうか。また、後輩たちは、川遊びは出来ても澄んだ水を目にすることはできないかもしれない。野菜の味も知らず知らずのうちに甘味を失うかもしれない。その変化に気付くのは、長年住まわれている先生方だけだろう。

美しい山々から澄んだ水を常に独立学園を含む小国の多くの人々に供給し、豊かな自然を地球本来のサイクルで地域を潤し続けてきた横川。ダムという人工的で、自然のサイクルを破壊する大工事によって、横川はくすんだ色を見せ始めている。私にとってそうであったように、横川は、これからもたえず学園生に自然の恵みを与え、直に自然そのものを教え、自然への感謝を学ぶきっかけであってほしかった。人間は自然を管理することがはたして可能なのだろうか。管理しようと試みることは地球にとって正しいことなのだろうか。地域に愛され、大切にされてきた川が、コンクリートで開閉される大きな機械となった。小国町の紹介として町のホームページはこう載せている。「山が多く険しい。雪と雨が多い。都市から離れている。こうした状況は簡単に見れば、本町は人の居住環境としては、恵まれていないと言えるのかもしれませんが。しかし、このような自然の摂理を人の手で変えていくことは不可能なことです。また、望ましくもありません。決してあきらめではなく、この環境とその中ではぐくまれてきた人々の力を最大限に生かし、その力を継続的に高めていくことが本町のまちづくりの基本姿勢なのです。」³ダム工事は本当に必要だったのであろうか。不必要な護岸工事をこれ以上頻発させずに、生きた川を少しでも多くこれからの未来に残していきたい。

³山形県小国町 Town OGUNI Official Site

<http://www.town.oguni.yamagata.jp/introduce/introduce.html>